『黒の仮面劇』におけるブリテン島統一のイメージ

西田　侑記

はじめに

ベン・ジョンソンの『黒の仮面劇』における独創的な筋書きと奇抜な舞台演出は、批評家の知的好奇心を刺激してきた。露出度の高い衣装を身にまとい、黒い化粧を施したアン王妃や女性宮廷人の身体表象がフェミニズム批評の俎上に載せられた一方で、ポスト植民地主義の研究者は、肌の漂白を夢見るエチオピアのニンフが予言の地ブリタニアを目指す本作品の寓話に、人種の差異を王権の美化に利用する国家的イデオロギーを読みとった。これらはいずれも社会文化史および政治史研究として示唆に富む論考ではあるものの、巨視的な視点に立つがゆえに上演当時の政治的文脈に即していない部分を含んでいた。とくにブリタニアの国家概念はしばしば無批判に議論の前提とされているが、ミクロ政治史の視座からこの作品を眺めた場合、ここには複雑な政情が絡んでいるように思われる。というのも、『黒の仮面劇』が 1605 年 1 月に上演されたとき、政界をにぎわせていたのはまさにグレート・ブリテンの誕生をめぐる討論であった。1604 年の議会でジェイムズ一世が訴えたイングランドとスコットランドの統合が、法的あるいは経済的な問題もさることながら、とくに国名の変更を要求する点で一部の議員から強い反発を受けたのは、彼らにとって新国家の樹立がとりもなおさず伝統ある自国の国威失墜と国民意識の喪失を意味していたからに他ならない。それならば、ブリタニアの復活を主題に据えたジョンソンの祝祭はまさしく「新しい国家意識の形成にともなう危機的瞬間」(Butler 115) を反映していると推測できるのではないか。このような仮定に基づき、本発表では黒の象徴性や王妃の身体性とブリテン島統一の言説との関連を分析し、『黒の仮面劇』の政治的意味を国王のグレート・ブリテン構想の中に位置づけてみたい。

1. 身体彩色とブリタニア

スティーヴン・オーゲルが「本当の革新」(149) と評した黒い化粧の導入には、演者の身体とブリタニアの国家表象との結節点を認めることができる。例えば、ウィリアム・カムデンの地誌『ブリタニア』に目を向けると、身体彩色の風習に古代ブリトン人の民族性を見出し、ブリタニアの語源を「染色」の意である “brith” に求める仮説が提唱されている (26-27)。染色された身体が仮面劇の黒いニンフとブリテン島の先住民を視覚的に結びつけるわけである。しかし、これには両義性が潜んでいる。メアリー・フロイドウィルソンは初期近代のイングランドにおいて、古代ブリトン人がしばしば非文明を体現するピクト人と同一視され、また両民族の身体彩色は野蛮のメトニミーでもあったと指摘している (122-123)。このような歴史認識を有する観客にしてみれば、蛮族の象徴たる王妃たちの黒い身体は自国の暗黒時代を想起させる不安の対象だったかもしれない。それゆえ、身体表象に内在するこの両義性を解消するため、ベン・ジョンソンは国王の「叡智の光」(*Blackness* line 210) を要請する。ブリタニアの太陽たるジェイムズ一世の放つ光には「エチオピア人を白くし、死体を蘇らせる力」(line 209) が宿っているとされ、これが「あらゆる被造物の欠点を直す」(line 211) と説明されている。すなわち、肌の脱色を望むニンフの物語は未開の古代人が新国王の超自然的な光に照らされ、文明人に生まれ変わる過程を寓話化していると理解できるのである。そうだとすれば、化粧を用いた身体的差異の可視化はブリタニアの国家概念に肯定的な意味を付与する上で不可欠な演出であろう。

2. 王妃の身体とその象徴性

『黒の仮面劇』においてジェンダーの言説と権力のスペクタクルはどのような関係にあるのだろうか。これについて批評家の意見は一致を見ていないものの、アンの身体性がステュアート王権の神話化に寄与している点は見落とせない。前王朝との決別を躊躇なく劇化する本作品は、上演当時「妊娠が明らか」(Orgel 150) だった王妃の身体を強調し、それによって新秩序の創造を礼賛する。ジョンソンの記述によると、アンは扇を携えて舞台に登場し、その片面には豊穣を意味する「ユーフォリス」という役名が、他方の面には子孫繁栄の寓意である「実をつけた黄金の樹木」が描かれていたらしい (lines 226-227)。また、物語の終盤で月の女神エチオピアはニンフに海水で身を清めるよう命じるが、この水には「輝かしいヴィーナスを生み出したとされる泡」が含まれており、その力によって彼女たちの美は「完全なもの」となる (lines 298-303)。女神生誕への引喩は妊娠中の王妃に観衆の意識を誘導し、アンの母親としての側面を前景化している。これはブリテン島統一の言説と無関係ではない。国家統合を扱ったパンフレットでは、王朝の断絶と連動して新国家が崩壊する懸念についてしばしば論じられている。この思考に基づくと、統一国家の安定はステュアート朝の存続なしにはありえ

ない。したがって国王夫妻は相補的な存在となり、子を産むアンの身体こそがグレート・ブリテンの安寧秩序を保証することになる。つまり、『黒の仮面劇』の王妃表象は妊婦の身体を活用し、王家の栄華を暗示するとともにブリタニアの永続性をも象徴しているのである。

3. 統合と同化のレトリック

ベン・ジョンソンの描くブリテン島はもはや同君連合ではなく不可分の統一体である。劇中でエチオピアは世界を指輪に、ブリタニアを宝石にそれぞれ喩えて島全体の有機的統一を描出する。イングランドとスコットランドを包摂するひとつの宝石の誕生は、従来の国境を越えた国家意識の形成を予期させている。さらに、ニンフたちの動きは「流れる」(line 215) という言葉で形容され、演者は水流のごとく舞台の境界を侵犯して男性宮廷人を舞踏に誘うのだが、フロイドウィルソンによれば、水の流動性を強調するこの修辞は多民族の共存と統合を示す常套句で、国王の議会演説とも興味深い類似を見せる (128-129)。1604 年の議会でジェイムズ一世は国家の統合を河川の合流になぞらえ、自らの領国統一の必然性を訴えかけた。小川が大河に、大河が大海に飲みこまれて各々の名前と差異を失うように、王国もまた統合によってひとつの大国となり、新たな単一性を得るのだとジェイムズは力説する (James 137)。これを踏まえると、黒いニンフと「ブリテンの男たち」(line 213) が男女の組となって踊る場面はまさしく国王の国家統一論と国民融和論の根底にある同化の論理を再現していることになる。異なった色の肌をもつ身体同士の接触はイングランド人の民族的あるいは国家的な同一性を再認識させ、肌の漂白は自他の境界が消える同化の過程を可視化してみせる。しかし、この行為は自己同一性の崩壊という危機的瞬間を想起させるがゆえに両義性を孕んでおり、それゆえ本作品の寓話は、マーティン・バトラーがいみじくも言い表しているように、「境界への不安と汚染の可能性を呼び起こす儀式」(115) ともなりうるわけである。そして、イングランドとスコットランドの両国民も新王が提案した相互の融和に対して同種の不安を抱いていたであろうことは想像に難くない。

むすび

以上みてきたように、『黒の仮面劇』は黒い化粧の象徴性、王妃の身体表象、そして統合と同化のレトリックを巧みに利用して理想国の誕生を祝福しているが、その過程で自己同一性の喪失と再成型という、新国家を想像する上でもっとも繊細な問題を顕在化させている。国王の神性が黒白の相克を超え、染色された肌を白く脱色する物語をとおして、ブリテン的他者を自己に内包しようと試みるこの作品は、まさに国家と国民の統合をめぐる理想化とトラウマの祝祭と呼べるのではないか。ブリタニア復活の主題自体に両義性が内在する以上、ベン・ジョンソンの創作した寓話にも単なる王権礼賛の言説に還元できない残滓がある。それは『黒の仮面劇』が国王のイデオロギーを再生産するだけでなく、ステュアート朝宮廷の政治力学そのものを映し出している証左といえよう。それならば、ミクロ政治史の視点から個別の仮面劇の政治的意味に光を当てる研究は、この絢爛豪華な総合芸術に潜む王権表象の両義性や解体の危機をいっそう明瞭にする一助となるに違いない。

引用文献

Butler, Martin. *The Stuart Court Masque and Political Culture*. Cambridge UP, 2008.

Camden, William. *Britain, or A chorographicall description of the most flourishing kingdomes, England, Scotland, and Ireland, and the ilands adioyning, out of the depth of antiquitie beautified vvith mappes of the severall shires of England: vvritten first in Latine by William Camden Clarenceux K. of A. Translated newly into English by Philemon Holland Doctour in Physick: finally, revised, amended, and enlarged with sundry additions by the said author*. 1610. *EEBO*.

Floyd-Wilson, Mary. *English Ethnicity and Race in Early Modern Drama*. Cambridge UP, 2003.

James I. *King James VI and I: Political Writings*. Edited by Johann P. Sommerville. Cambridge UP, 1994.

Jonson, Ben. *The Cambridge Edition of the Works of Ben Jonson*, 7 vols. Edited by David Bevington, Martin Butler, and Ian Donaldson, Cambridge UP, 2012.

Orgel, Stephen. 'Marginal Jonson'. *The Politics of the Stuart Court Masque*, edited by David Bevington and Peter Holbrook, Cambridge UP, 1998, pp. 144-175.